22132039

International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

JAPANESE A: LANGUAGE AND LITERATURE – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A : LANGUE ET LITTÉRATURE – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A: LENGUA Y LITERATURA – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Wednesday 8 May 2013 (morning)
Mercredi 8 mai 2013 (matin)
Miércoles 8 de mayo de 2013 (mañana)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write an analysis on one text only.
- It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.
- The maximum mark for this examination paper is *[20 marks]*.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez une analyse d'un seul texte.
- Vous n'êtes pas obligé(e) de répondre directement aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le souhaitez.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est *[20 points]*.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un análisis de un solo texto.
- No es obligatorio responder directamente a las preguntas de orientación que se incluyen, pero puede utilizarlas si lo desea.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es *[20 puntos]*.

© International Baccalaureate Organization 2013

次のテキストの中から**一つ**選んで、分析しなさい。文脈、読者層、目的、及び形式や文体の特徴の重要性についても言及しなさい。

テキスト1

2冊分が1分で伝わる

おぎ・なおき　1947年滋賀県生まれ。早稲田大学卒業。私立高、公立中学校での22年間の教員経験後、臨床教育研究所「虹」を開設。著書は180冊を超えた。法政大学キャリアデザイン学部教授。

「例えば『子供にそんな叱り方しちゃ絶対だめよー』っていうと、ブログに『わかりました』『そうします』って、たくさん反応が来る。講演に行くと、若いお母さんたちが、その発言に納得したという顔をしているんですね」

本を何冊書いても伝わらないのに、10秒20秒の一言で簡単にわかるはずがない。当初、そう疑っていた。子供への体罰をどんなに批判しても、「しつけの一環」と考える親には伝わらない。だが、全国各地を回るうちに得心した。

「ウソじゃない、伝わっていた。いくら論理的に説得しても相手に伝わらないのに、一言で相手の心にストーンと落ちている。脳がリラックスしているとき、波長があう形で柔らかく言われると肝心な部分が伝わるんだとわかった。新書で2冊書いたことが、バラエティーで1分で伝わることもある」

教員時代から親交がある北海道教育大教授、今泉博（62）は、新刊の『尾木ママの「叱らない」子育て論』を読んでみた。「1時間で読めるが、本質がおさえられている。教育や子育てには指示や命令でなく、『聞く』ことがどれだけ大事か。難しいことを敬遠しがちな普通の若いお母さん、お父さんたちに、子供の目線に立つという尾木さんの考えが浸透すれば、深部から教育の流れが変わってくるのではないか」

8月24日、伊勢原市の講演後、尾木はテレビの番組収録に向かった。ここでは、派手なGジャンや、濃いピンク地のヒョウ柄のひざ下パンツ姿になった。尾木ママが日々の報告をするブログは最高45万アクセスを記録し、「かわいいー」「イヤされる」の二言が並ぶ。

「尾木ママ」は教育変える回路

教育評論家　尾木直樹

8月24日に神奈川県伊勢原市で開かれた同市主催のシンポジウム。

講演に立った教育評論家の尾木直樹（64）は約1200人の聴衆に対し、最近必ず尋ねる質問をしてみた。自分のことを前から知っていた人はどのくらいいる？会場で、挙手を求めるのだ。

「自分のこと」とは、いじめ、虐待、学力など教育問題を中心にメディアで発言する言論人、2006年の教育基本法改正では、衆院特別委員会で反対の参考意見を述べたリベラルな教育評論家としての自分のこと、つまり「尾木ママ」になる前の尾木直樹のことである。

1200人で40人弱。「1000人の聴衆がいたら50人、5％程度。テレビにも出てたのに、これほど知られていなかったんですよ。みんな尾木ママからなの。尾木ママだっーて見に来るんです」

会場の大半には、「00年代以降、自民党政権が進めた教育政策に反対し、精力的に戦い続けてきた論客」の認識はなく、「なのよー」「もーん」といった柔らかなおネエ言葉のトークが楽しい「尾木ママ」その人でしかなかった。

還暦を超えてからの予想もしなかった人生の異変を尾木は歓迎し、「今は生き直しているような気分」と喜ぶ。

突然のブレークは、09年末に放映されたテレビの特番からだった。

バラエティー番組初体験。司会の明石家さんまとかわした関西人同士のじゃれ合うような会話の中で、さんまが尾木の話し方を「ママみたい」と評し、尾木は「違うもーん」などと返した。CM中だと思ったその会話がすべて番組で流れ、「もーん」の字幕に、ピンクのハートマークがついていた。尾木は仰天（ぎょうてん）した。

尾木を知る人間に言わせれば、昔からの言葉遣いで、素のままの姿だった。だが、バラエティーの巧みな演出で、ユニークな「尾木ママ」が誕生した。各局から次々と出演依頼が舞い込んだ。

ときには派手な衣装をまとい、芸能人とおネエ言葉でからみあう。

知人からは、「ピンクの服を着る必要があるのか」「そこまですべきじゃない」といった批判も届いた。だが、尾木は次第に、今までの評論家活動では決して手が届かなかった層に、言葉が届いているという実感を持ち始めた。

朝日新聞「逆風満帆」2011年9月10日より抜粋
写真：日刊スポーツ新聞社提供

– 尾木氏の人物像を描くために、この文章の表現やスタイルにはどのような工夫がしてあるか、またその効果などについても述べなさい。

– この文章と尾木氏を理解するために、社会的背景や書かれた目的や対象としている読者層が大切であることについて述べなさい。

テキスト2

庭にくる鳥

庭に作った鳥のえさ台には冬は毎日りんごを半分おくことにした。そうすると、ひよどりやむくどり、おながなどがそれを食べにやって来る。半分のりんごはだいたい一日でたべつくされるが、その代わり彼らは台の上や下にふんを残していく。

そのふんの中には、丸いのや長いのや大きいのや小さいのや、何か植物の種子が入っている。それでそれを集めて保存し、四月ごろに鉢にまく。そうすると入梅のころからいろいろなものの芽が出てくる。

ふた葉のときは何の芽かわからないが、本葉が出るとおよその見当がつく。そして秋ごろまで待つと、もうはっきり何であるかがわかる。そのようにして、いままでに生えたものの名をならべると次のようなものがある。

ツタ。アオキ。ネズミモチ。イヌツゲ。ビナンカヅラ。ナツメ。オモト。シュロ。ツルバラ。

どれもこの辺のあちこちに見られる植物である。ツタとアオキが圧倒的に多いのは、この二つがうちの庭にあって、冬たくさんの実をつけるからだろう。このはなしをある人にしたら、タヒチ島やヒマラヤにしか生えない植物でもでてきたらおもしろいのだがなあ、といわれた。

冬から春にかけて来る鳥は、ひよどり、むくどり、おながのほかに、しじゅうがら、あおじ、かわらひわ、ひたき、うぐいす、めじろなどがある。その中でおなが、しじゅうがら、そしてむくどりは一年じゅう来る。ひよどりは夏に山へ帰るという話だが、何羽かは残っているらしい。春から秋にかけてはきじばとが毎日のようにくる。五月ごろしじゅうがらは十数羽の集団でチーチー鳴きながらやってきて、庭木の虫をとってくれる。すずめはもちろん一年じゅうやってくる。庭には来ないが、どこか近くにからすが住みついているらしい。

十年とちょっと前ここに越してきたころのことを思い出すと、近くの畑にはひばりが毎年やってきた。そして点のように見えるまで五月のそら高く歌声をまきちらしながら舞い上がってはおりて来、また舞い上がってはおりて来していたものだ。しかし、今はそういう光景を見ることはできない。また三年ほど前までは、こじゅけいのチョットコイがしょっちゅう聞かれ、それどころか、おや鳥が数羽の小さなひなをつれて歩いている姿なども見られた。しかしそれも今ではみられない。ひばりが巣作りした畑にはアパートができ、こじゅけいの住んでいたやぶには一部には家が建ち、一部は児童公園になった。そしてこじゅけいの代わりに砂場で遊ばせるために小さな子どもや孫たちをつれてやってくる人間の姿が見られる。

朝永振一郎（ともながしんいちろう）『庭にくる鳥』1975年、みすず書房

チョットコイ　こじゅけいの鳴き声は「チョットコイ」と聞きなされてきた。

– この文章のもたらす穏（おだ）やかな印象と書かれた目的について、どのように理解していますか。

– 鳥や植物の名前など、この文章における言葉の使い方がどういう効果をあげているか分析しなさい。